

英語における語りのかたちについて¹

熊谷 吉治

1. はじめに

ことばの研究には様々な方法がある。実際に発せられたことばを収集し、それがどのようなかたちをしているか調べることも、重要な方法の一つである。ここでいう「かたち」とは、音声ないしは手話によって表現されたものであり、心内で作られた考え（意味）を具体化したものである²。かたちには様々なレベルがあり、「語」から「文」、さらに「文章（談話）」という、意味のつながりを持ったレベルまである。ここでは、談話における文のかたちを考察対象とする。かたちを見つめることは、たとえ間接的であるにせよ、背後にある意味や、さらにその背後にある心の姿に接近することであり、ことばによって伝えようとする情報、意図の理解にもつながる。

本論では、同一の経験を複数の人たちがそれぞれ自分のことばで語った時、その語りの中に一貫して現れるかたちの特徴について考える。さらに、この興味深い共通点の背後にある、ことばと心の仕組みについて考察を試みる。

2. 「語り」と「かたち」のどこに注目するか？

発せられたことばの背後には、何らかの意味や情報、話し手の意図が存在する。仮に複数の人が同一の経験をして、その経験をそれぞれの人がかたばにしたら、その語りの中身にどのような違いが出て来るであろうか？ 同じ経験を基にするにせよ、人によって出来事に対する印象は異なるであろうし、それゆえ、ことばとなって現れるかたちにも大きな違いが出てくるのではないかと考えるのが自然であろう。しかし仮に語りのかたちに多くの人に共通する方向性があるとすれば、それはどのようなものであろうか。

ある出来事が記憶に残ったとする。そして、その様子を思い出しながら誰かに語りようとする、出来事にかかわった人やものが話し手の心の中で映像

化され意識にのぼる。出来事の背景も、程度の差こそあれ、やはり意識化される。そして、時間的経過にしたがって登場人物が何を行い、どんな変化に遭遇していくかを思い出し、語るであろう。あるいは、別の人物が登場し、先述の人物とともに何か新たな出来事を引き起こすことも考えられる。

一連の出来事を思い出しながら、意識にのぼった人やもの、そして情景について語るわけであるが、では、そのことばのどの部分に着目するのか？色々な可能性や考え方が存在するが、ここでは次のように考える。つまり、登場人物や情景が、語りの中で初めて出てきた場合と、後で繰り返して出てきた場合とで、ことばによる表現のされ方の違いやそれらが文で現れる位置を比較するのである。初めて出て来る時と、続いて出てくる時では、同じ人やものに言及しても、表現形式が変わることが考えられる。その変化の仕方に何か方向性はないであろうか。登場した人やものが文の「主語」、「目的語」といった文の位置にどんな現れ方をするか？登場人物はこのような位置に、何の制約もなく自由気ままに現われるのであろうか？人やものが表現される際の環境をたどっていくことにより、語りのかたちの一側面を明らかにする。

3. 分析の方法

色々な人の語りを比較するうえで、まず被験者に対して同一の経験を提供することが必要になる。無声映画（約6分）を見せ、直後にその内容について語ってもらった資料を分析に用いた。なお、映画はこの目的のためにカリフォルニア大学バークレー校言語学科で作成されたものであり、インターネットを通じて閲覧することが可能である³。

今回考察するのは、この無声映画（西洋梨がストーリーの中で重要な役割を持つため、“Pear Film”と呼ばれている）を実際に見て、その内容を語ったアメリカ人大学生の「語り」のかたちである。カリフォルニア大学での実験で集められた米語女性話者の資料である。

20人の学生それぞれの語りが録音された。そして文字化された資料は公開されている。日本語やギリシャ語、中米グアテマラのサカプルテック語など、異なった言語・文化の背景を持った人達を対象に同様の実験が行われ、異なった言語話者が同一経験をどう表現するか調査が行われた⁴。

米語話者20人の語りは、これまで誰も包括的な分析を行っていなかった。今回示すのは、筆者が独自に行った資料分析の結果である⁵。

4. なぜ「自発的」談話か？

語りには色々な種類がある。頭に浮かんだ事を聞き手に向かって音や手話で伝達し、その内容を理解してもらおうという点では、どんな語りも変わりはない。だが、話し手がどのような心的状態でその中身を伝えるかによって、語りの形態や特徴は変わってくる。

特に注意すべきことは、考察する語りのデータが「自発的」であるということである。被験者はいずれも、映画を見た直後に内容を語るよう促されている。この点で、予め用意された文章を読むような語り（紙芝居や絵本の読み聞かせなど）とは異なる。話し手は頭の中で十分な準備ができず、文字などによる助けもない。思い出すまま、語ることを余儀なくされる。これにより、心の中に思い浮かんだものを言語化する際の自然なデータを得ることが出来るのである。

5. 映画の内容と被験者の反応

被験者の語りを収集する際に使用された“Pear Film”は次のようなストーリーである。

ひげを生やした農夫が洋梨を収穫している。梯子を使って梨の木から降りては、エプロンに入れた梨を地面のかごへ入れていく。そこへ一匹の山羊を引っ張りながら男が通り過ぎる。その後、男の子が一人自転車でやって来る。農夫は収穫に夢中で、男の子に気づかない。すると男の子は、梨一杯のかごを一つ自転車の荷台にのせて逃げてしまう。

砂利道を進んでいくと、反対方向から女の子が自転車で近づいて来る。すれ違いざま、男の子の頭から帽子が飛んでいってしまう。帽子に気をとられていると、自転車が、道に転がっている岩にぶつかり横転する。そのはずみで梨が道に散乱する。

ほこりを払い、立ち上がろうとすると、目の前に突如三人の少年が現れ

る。一人はパドル（卓球のラケットのようなもの）を持って、糸でつないだ球を打ち続けている。少年達は、散乱した梨と倒れた自転車を元通りにする。助けられた男の子は自転車を転がしていくが、三人の少年達は道に落ちている帽子を見つけ、口笛を吹いて彼を呼び止める。パドルを持った少年が男の子に近づき、帽子を渡してやる。男の子はお礼にと、少年に梨を三つ渡してその場を去る。少年達は梨を食べながら、男の子が自転車で通って来た道を歩いていく。

ここで、画面に再び農夫が現れる。木から降りて来ると、かごが一つない事に気づく。「なぜ？」と考えていると、三人の少年達がやって来る。三人は、いぶかしがる農夫の様子に目もくれず、梨を食べながらそのそばを通り過ぎていくのであった。

無声映画を使用したのは、言語や効果音の存在が特定の文化圏の話者に有利（ないしは不利）に働くことを避けるためである。とは言っても、どのような文化圏の話者にとっても中立的（透明）なものを作り出すことは困難である。たとえば“pear”は、日本国内で普通目にする梨（「幸水」や「二十世紀」と呼ばれる品種など）ではなく、いわゆる西洋梨（「ラフランス」のような品種）である。日本語を母語とする被験者の多くが、この果物を「りんご」と表現していた。米語話者でもpearではなくappleと表現する被験者がいた。

さらに、「実験」というシナリオに慣れていない文化圏の話者もいて、映画を見た後でインタビュアーと一対一になって録音を行うことを承諾してもらうのに苦労をしたこともあったという。

実際に被験者が語りを行っている最中、聞き手（録音者）は質問などをしていない。録音者は、あたかも映画の内容を知らないかのように振舞い、被験者に今見たばかりの映画の筋を語るように促している。したがって、被験者がある人やものに初めて言及するとき、それは話す側にとって意識にのぼったばかりのものであり、聞き手にとっても初めて耳にするものとみなすことが出来る。

語りの中で初めて登場した人やものが言語化されたとき、その表現を新し

い情報、ないしは新しい指示物と呼ぶことにする。同じ人やものが何度も登場すると、話し手と聞き手双方の意識にのぼった状態になる。このような状態を反映している言語表現は古い情報、ないしは古い指示物と呼ぶことにする。注意しなければならないのは、初めて登場した時から時間が経過するにつれて、同一の指示物に対する意識度はダイナミックに変わりうるということである。そして、その変化は部分的に言語表現に現れるのである⁶。

6. わかったこと

6.1. 語りに登場する人やもののかたち

語りに登場する人やものは、言語化すると名詞になり、それらは文の中で主語・目的語・補語・前置詞の目的語といった位置に現れる。具体例を見てみよう。なお、説明の便宜上表記を簡略化してある。初めて登場する人やものには下線を施してある。自発的な談話は準備して書かれた文章とは異なり、不完全な文や句が多いことに注意されたい。また、文章をよどみなく話し続けるのではなく、文の途中や文と文の間でポーズがあり、長さに応じて“..”や“...”で表してある。

- (1) Sure. There was a man picking..., u-m a Latin looking man, and he was picking pears..., in an apron..., that.. he had baskets... for. (中略) And a man walked by with a goat, and nothing happened and he kept on going..., and then a little boy..., about a bic a red bicycle, that was too big for him..., he stopped... took a pear, and then on second thought he decided... to take the entire basket... (Speaker 20)

(ストーリーを語るよう促されて) いいわよ。男の人がね、何か取ってるの。中南米の人みたい。で、その人が梨を取ってるの。エプロンに入れて...あとでかごに入れるための、ね。(中略)で、別の男が山羊を連れて歩いて近づいてきて。でも何も起きずに、そのまま歩いて行って、そしたら今度は男の子が、自転、赤い自転車がしながら、ちょっと大きすぎるんだけど、立ち止まって。で、一個梨を取っちゃったの。そしたらまた考え直して「やっぱりかごと持ってっちゃえ」って...

上の例は、一人の話者の語り始めの部分である。梨を収穫する農夫、山羊を引っ張ってくる男、自転車に乗ってきた男の子が次々と登場してきている。

ここから、「主語」、「目的語」といった文法的概念と、人やものが語りの時点でどのくらい話し手の意識にのぼっているか、つまり「情報の新旧」という概念の両方が絡んでくるので注意されたい。

話し手が登場人物について語っているとき、そのことばのかたちにはどのような特徴があるであろうか。即座に次のことがわかる。初めて登場する人やものは「不定」冠詞つきの名詞というかたちをとる (*a man, a little boy, a goat, an apron, a red bicycle*)。もちろん初めて登場するものが複数であれば不定冠詞は伴わない (*pears*)。新指示物は、まだ話者の意識にのぼったばかりで、指示の度合いが不安定であり、そのため「定」冠詞をつけることが不適切なのである。

一端話に登場するとその指示物への意識度が高まり、指示度が安定する。(1)の話者のように、導入したばかりの人物について言い換えをして指示度を安定化させようとすることもある (*a man* → *a Latin looking man*)。しかし、引き続き同じ指示物について語るときは、代名詞化するのが普通である⁷。

6.2. 新しい情報は文の終わりに現れやすい

初めて語りに登場してくる人やものは、名詞が現れうる場所であればどこにでも現れるのであろうか？文の内部構造を考える英文法では、名詞の現れる場所は明示するが、どのような情報構造の名詞が来やすいかについては何も教えてくれない。実際に調べると興味深い事実が判明した。

- (2) There was a man picking....
- (3) and he was picking pears.... in an apron
- (4) And a man walked by with a goat

大半の新指示物は文末位置ないしは動詞の後に置かれている。言い換えれば文頭の主語に新しい情報を入れる頻度が非常に少ないということである。こ

の傾向は、(1)の話者だけのものではない。20人の米語母語話者の談話資料を分析した結果判明した、一貫性ある傾向なのである。調査結果を表1に示す。

新情報の現れた位置と具体例	数	比率 (%)
他動詞主語 (A <u>man</u> was picking pears,...)	5	1.4
自動詞主語 (And <u>a man</u> walked by with a goat.)	47	13.3
他動詞目的語 (and he was picking <u>pears</u> ,...)	178	50.4
前置詞目的語 (And a man walked by with <u>a goat</u> .)	99	28.0
その他 (and then <u>a little boy</u> ,... about a bic a red bicycle, that was too big for him,...)	24	6.8
合計	353	99.9

表1. 新情報の現れる位置と出現頻度の関係(女性米語母語話者20人)

文のどの位置か判断が困難な場合や、文内の要素ではなく、付け加えとして発せられた例(表1の「その他」)も一部あるが、新しい情報の現れる度合いは文の位置により大きな偏りがあると言える。

6.3. 一つの文の中に、新しい情報は一つが限度

次に、一文中にどれくらい新しい情報を入れられるのか考える。他動詞であれば名詞の入る位置が少なくとも二つ(二重目的語構文なら三つ)ある。さらに場所などを示す前置詞句を含めれば、文内に新しい登場人物やものを複数押し込めることが可能なはずである。

- (5) A man was picking pears in... what seemed to be his orchard.
(男の人が梨を取っているの。自分の果樹園みたいなんだけど。)

ところが、このような例が自発的な語りで登場することは極めてまれであった。仮に現れるとしても語りの冒頭付近である。語り始める前は、心の中の準備が多少は可能なので、頭の中で事態を整理し、内容をコンパクトな形で伝える事が出来る。ところが、話が進むにつれてそのような準備の時間はなくなり、意識にのぼるものを順次文の中に組み入れて行く。実際の心の働きを観察するには冒頭よりもその後からが有効であることを示唆してい

る。事実、語りの冒頭以外で(5)のような事例は出てこなかった。語りの中に出てくる文にどれくらい新情報が入るのかを、表2に示す。

新情報 数 文型	新情報なし		文内に1つ		文内に2つ		文内に3つ		合計
	数	%	数	%	数	%	数	%	数
他動詞構文	659	87.2	91	12.0	6	0.8	0	0.0	756
自動詞構文	579	92.2	48	7.6	1	0.2	0	0.0	628
be動詞構文	202	73.7	69	25.2	1	0.4	2	0.7	274
合計	1,440	86.9	208	12.5	8	0.5	2	0.1	1,658

表2. 文内に現れる新しい指示物の数とその割合(女性米語母語話者20人)

ポイントは二つある。まず、文内に二つ以上新しい指示物が現れる頻度は極めて少なく(1%未満)、新情報が登場するとしても、せいぜい一つである。仮に二つ以上現れるとしても、先述のように語りの冒頭であったり、新しい登場人物が*and*で複数結ばれたりする例ばかりである。例文(3)では主語以外の位置に新しい指示物が二つ現れていたが、この文には目的語(*pears*)と前置詞句(*in an apron*)の間、さらにその前置詞句と関係節(*that he had baskets for*)の間にポーズがある。詳しい内容を添えてもう一度示す。

(3') and he was picking pears, [1.0] in an apron, [0.25] that.. he had baskets.. for.

カッコ内の数値はポーズの時間(秒)を示している。“..”で表された部分は計測困難な短いポーズを表している。二つの新指示物*pears*, *an apron*が一つの文の中でよどみなく現れているとは言いがたく、*pears*を導入した後、独立したメッセージ単位のようになって前置詞句や関係節が現れている⁸。

もう一つのポイントは、大半の文には新しい登場人物が全く含まれていないということである⁹。“Pear Story”の語りは、普段の会話とは違い、様々な登場人物が次々現れ、ストーリー展開も豊富である。にもかかわらず、語っている話者の文を観察すると9割近くは新しい指示物を伴っていない。

これと表1の結果をあわせてみると、英語における語りには次のような顕著な特徴があることがわかる。つまり、英語の文は、文法的には[主語・動詞・目的語・前置詞句]という配列であるが、ことばの実際の使われ方という観点から整理すると、[代名詞・動詞・(代)名詞・前置詞・(代)名詞]というかたちになりやすいのである。英文法で例文として使われる文は、(6)のようなかたちをしていることが多いが、新情報は主語以外に導入されることが多いため、必ずしも実際に発せられる英語の姿を反映してはいない。

(6) A man put pears in a basket.

このような特徴を最初に明示的に指摘したのはDu Bois (1987)である。Du Boisは、英語とはまったく体系の異なる中米グアテマラのサカプルテック語の話者から収集した“Pear Story”の語りを元に、「主語（特に他動詞の主語）には新指示物は導入しない」、そして「一つの文に新指示物は多くても一つだけ」という制約が存在することを明らかにした。興味深いことに、この傾向は本論で述べている米語の語りに矛盾なくあてはまっている¹⁰。

6.4. なぜ新情報は「主語」を避けるのか

名詞が入る場所にはどんな情報構造の指示物も同じような確からしきで導入されて良いはずである。しかし実際の語りでは、主語に古い情報が圧倒的に来やすいことがわかった。なぜこのような傾向が存在するのであろうか？

この差には主語や目的語位置が持つ、意味と情報構造の特徴が絡んでくる。まず意味を考えた場合、ストーリーの中で連続して登場するのは、主人公と呼ばれるような人であろう。そしてその主人公が一端話に登場すると、場面展開に従っていろいろな出来事を引き起こす。一方、主人公による働きかけの対象は、物語で継続して語り続けられる頻度が低い¹¹。意識にずっとのぼり、出来事の主体になる人が「主語」に来やすいのはそのためである。意識に継続的にのぼっているのであるから、そのような人が言語化される際、名詞でなく代名詞で表されるのも至極当然な話である。

情報構造の観点からは次のことが言える。主語はメッセージの「スタート

地点」としての役割 (Chafe(1994)) を果たしている。語順からもわかるように、主語は文において最初に名詞が現れる場所である。その位置に指示対象の不安定な人やものがいきなり現れると、聞き手にとっては処理に時間がかかる。すでに知っていることを元に、新しいことを加えていく方が出来事
の理解がスムーズだといえる。

情報的に新しい人やものを語りで伝えようとする際は、導入に伴う聞き手の処理コストを考え、メッセージの取っ掛かりになる主語位置への導入を避けているのである。実際会話においても、主語には場所的な表現を使用し、新指示物は目的語位置などに導入することが多い。次の例を考えてみよう。

- (7) There was a farmer had a dog.
- (8) I have a guy who came from Japan.
- (9) ここに学校があるやんか。そしたら道のこの辺に蛇が死んどった。

(7)における *There* はまさに場所表現に他ならない。それが主語位置に現れ、新指示物を導入する上での心的な場所設定を行っていると考えられる。先に述べたように主語には出来事の主体が来やすいが、対照的に目的語（ないしは補語）の位置は主体でない人やものが来やすい。

「登場人物を新たに導入する際には一つの文中で一つが限界」という制約と
考え合わせると、主語ではなくて文末位置に新しい指示物を置くという傾向
は偶然ではなく、意味や情報構造、発話の処理（理解）という複数の動機に
支えられていることがわかる。

同じことは他動詞構文をとっている(8)にもいえる。(8)のように *have* が使
われる状況を考えると、「私」が「日本から来た男性」を所有物にしている
という解釈は不適切である。*I* は、文法的には「主語」の位置にあるが、意味
的には(7)の *There* と同様に「場所」と考えるべきである。自分のそばにある
男性が来ている、という意味である。あえて *I* を日本語に訳す場合、「私は」
ではなく「私のところに」といった具合に場所を表す表現を加えたほうが理
解しやすい¹²。さらに言えば、(8)の「主語」はその文を発している本人であ
る。つまり、聞き手にとって古い情報に他ならない。

(9)は、実際に筆者が耳にした話しことば（日本語）の例である。発しているのは小学生であるが、だからといって大人の発話ではありえないということではない。ここで問題になるのは、学校から帰って来て親に向かってその日の出来事を話している小学生が、どのようにして新しい（聞き手にとって予想していない）情報を文の中に配置しているかにある。まず、おおまかな場所を提示し、だんだんと範囲を狭めた上で、顕著な出来事（と動物）を導入している。このように場所を明示した上で登場人物を導入する方法は、日本語でも何気なく利用されているのである。

念のために付け加えるが、(7)から(9)のような表現形式が当該事態を表現する上での唯一無二のものだと主張しているのではない。ただ、自然な対人コミュニケーションの状態（あらかじめ準備をしたり、話す順序を整理したり、文字にして書いたりといったことを伴わないような状態）において頻繁に選択されるかたちであり、そのようなかたちを使うのは偶然ではなく、そのかたちのもつ意味や使い方の特徴に動機付けられているのである。

仮に自発的に談話が行われるような場面で、スタート地点としての働きを持つ主語に新しい情報が多数詰め込まれたらどうなるか考えてみよう。とはいえ、これまでのデータが語っているように自発的発話で「重い」主語の出てくる頻度はきわめて低いので、書きことばを朗読するかたちで誰かにメッセージを伝える場面を想定してみよう。もし次のような新聞記事の内容を知り合いから伝えられたらどうであろうか？

- (10) 「2004年3月期決算が大幅赤字となる見通しのUFJホールディングス（HD）が、傘下のUFJ信託銀行を住友信託銀行に約3000億円で売却することで基本合意したことが、19日明らかになった」んだって。
（読売新聞2004年5月20日電子版から。下線は筆者による。）

これほど構造が複雑な主語が話しことばで現れた場合、それを処理する上でのコストの大きさ（ないしは処理する側の不愉快さ）は計り知れない。この主語がわかりにくいのは、概念上の難しさだけでなく、話のスタート地点に文的意味内容を持った新情報主語が複層的に現れているためである¹³。

書きことばは（ジャンルにもよるが）話し言葉に比べ、あらかじめ思考を整理してから表現するのが普通で、無駄を省こうとする傾向がある。そのため、スタート地点からいきなり処理困難な内容を盛り込むこともある。しかし、新聞や論文のように、最初から読まれることを前提にして作られた書きことばは何度も読み返せるので、読み手は時間をかけて理解できる。一方会話は、ダイナミックに進み、しかも対人的なので一人で立ち止まって考えることは困難である。(10)は、古い情報に新しい情報を付け加え、認知環境を更新するという話しことば本来の姿を逆説的に示しているといえる。

6.5. 語りは、自動詞と他動詞の違いを教えてくれる

6.2.で述べたように、新しい登場人物は主語位置に来る頻度がきわめて低い。しかし、表1をみると自動詞か他動詞かで新情報の頻度に差がある。自動詞主語が47例あり、全体の13.3%であるのに対し、他動詞主語は5例(1.4%)に過ぎない。文末に近い動詞目的語(178例で50.4%)や前置詞目的語(99例で28.0%)に比べれば少ないが、主語どうしで比較をすると大きな差がある。仮に新情報が主語に来ることがあっても、例文(4)のように自動詞の主語である可能性が他動詞よりも高い。これは偶然なのであろうか？

「一文中に新指示物は一つが限度であり、しかも主語位置を避ける」のであるから、他動詞構文において新指示物が目的語に来やすい事は理解できる。問題は、主語位置にだけ名詞をとる自動詞構文では、「新指示物は主語を避ける」という制約が他動詞構文ほど強く働いていない点にある。同じ「主語」というカテゴリーでありながら、自動詞と他動詞では違いがあるのだろうか？実際に語りで用いられた新情報を伴う自動詞主語を調べると、新たに次のことがわかった。以下に、実際に用いられた動詞句を列挙する。

(1) 人を新主語にとる動詞句

appear, come, come along, come by, come up,
happen by, pass, pass by, ride, ride by, walk by,
be bumped, be a little bit away, be in the distance

人以外を新主語にとる動詞句

get blown off, blow off, come off, fall off,

fly off, pass by

使用されている自動詞の大半は、主語位置で表された人やものが「現れる」、「通りかかる」、「やって来る」、「飛んで行く」といった具合に、人やものの登場、状態や場所の変化を表すものである。これは、典型的な主語の持つ意味特徴とはかけ離れている。自動詞主語には、他動詞の多くが持っている「主体」という意味的特徴を持ったものもあれば（たとえば *dance, drink, shout* の主語）、(11)が示すように、「主体」としての解釈が困難なものも含まれている。つまり、自動詞主語には、「主体」としての主語を受け入れる一方で、「主体」と対極にある目的語的な主語も受け入れて新指示物の導入を行うという、興味深い二面性が存在するのである。語りのかたちを分析することにより、一口で「主語」と片付けられてしまう現象の複雑さ、さらには「自動詞」という概念の複雑さが浮き彫りになるのである。

7. まとめ： 語りのかたち

語りの構造に着目することで、普段無意識に行っている言語行為がある種の方向性を持って行われていること、そしてそれは言語固有の仕組みによるものばかりではなく、背後にある心の仕組みが影響を与えていることがわかる。このような知見は、かたちを単なるかたちとして見るだけではなく、そのかたちがどういう使われ方をしているか、かたちの背後にどのような意味や情報構造が潜んでいるかを観察することによって初めて得られる。かたちを単なる記号の連鎖として機械的に計算・処理するだけではわからない心の働きやその反映が、たとえ間接的にせよ映し出されるのである¹⁴。

注

- 1 この研究は、平成14年度愛知県立大学学長特別研究費（課題名：英語における能格性研究と談話分析基礎理論の構築）による研究成果の一部である。
- 2 本論は、音声言語を分析した結果を元に議論を進めているため、手話言語において同

様のことが言えるかどうかという、重要で興味深い課題について触れる余裕がない。しかし、音声言語と手話言語は表現モードが違うだけで、背後にある基本的な働きや意味と形式との結びつき方、生成能力などはきわめて類似している。手話言語の言語学的考察については、ジャッケンドフ（水光訳）（2004）がわかりやすい。

- 3 <http://www.pearstories.org/docu/ThePearStories.htm>
- 4 このプロジェクトは当時のカリフォルニア大学バークレー校言語学科教授Wallace Chafe氏を中心に行われたものである。米語女性話者の文字資料や主な研究成果は、Chafe, ed. (1980)に収められている。
- 5 米語女性話者の分析に関する包括的な分析結果は、熊谷(2001, 2004)でその詳細が紹介され、議論が展開されている。米語以外の言語分析は、Du Bois(1987)によるサカプルテック語の分析が最も重要である。それ以外にも日本語(Clancy(1980), Downing(1980))やギリシャ語(Tannen(1980))についての興味深い分析が報告されている。
- 6 指示物がどのような状態で話し手の意識にのぼっているかを考えた時、新しいか古いかという単純な二分法では捉えきれない場合もある。ここでは議論をわかりやすくするため、そのような中間的な指示物については触れない。また、人やものが常に特定の誰か、あるいは何かを明瞭に指し示すかということ、必ずしもそうではない。たとえば、*somebody*や*something*といった語がそれに相当する。実際、語りの中でもそのような不定名詞句が現れるが、そのような表現は実際の分析から除外してある。
- 7 話の中で一端意識から遠のき、別の場面で再登場するような人やものもある。この場合、代名詞ではなく、定冠詞を伴った名詞や、関係節で修飾された名詞というかたちになって現れることが多い。冒頭に登場した農夫は、話しの終わりになって再登場する際に*the pear picker, the man who was picking pears*などと表現されている。
- 8 このようなポーズを基準に発話を区切っていくと、普段書きことばで用いる文とは必ずしも合致しないことが多い。本論では、主語、目的語といった、文の文法に照らし合わせて指示物の分布を調べているので、この例は前置詞句までを含めて一つのメッセージ単位(文)とみなして分析している。
- 9 本論でいう「新しい指示物」や「新しい情報」という概念は、あくまでも談話に初めて導入された人やものだけを指していることに注意しなければならない。言語コミュニケーションは、基本的に話し手が聞き手の認知環境を変えることであるから、メッセージの中に一つも「新情報」がないのは矛盾に聞こえる。しかし、それは「新情報」という概念の射程範囲を適切に拡大することによって解決する。ここでは詳しく論じる余裕がないが、詳細は定延ほか(1999)を参照のこと。
- 10 サカプルテック語、英語以外の言語でもこのような制約が語りに課せられていることが、様々な研究によって明らかになっている。詳細はDu Bois(2003a, b)を参照のこと。
- 11 “Pear Story”の場合、人だけでなく梨も頻繁に登場するが、梨は人のように何らかの事態を引き起こすことが出来ない。そのため、梨は状態や場所の変化を意味する表現の

中で使われている。たとえば、実として木になっていたところをもぎ取られ、エプロンからかごへ移動する。さらには男の子によって自転車のかごに押し込められ、路上に散乱し、別の男の子たちに渡り、最後には食べられるのである。

12 *I have a brother and a sister.* における *I* も同様である。「私には」という場所表現を使用することにより、この文の意味を日本語で適切に理解することが容易になる。場所としての意味役割を担っても、主体としての意味役割を担っても、ともに *I* というかたちに押し込められているのである。

13 複層的な主語を解きほぐしていくと、名詞が来る主語位置に文的内容を持った概念が複数存在していることがわかる。つまり、この例文の主語は、

- (i) U F J ホールディングスという会社がある
- (ii) その会社の決算が大幅赤字になる
- (iii) U F J ホールディングスは、持ち株会社なので、下にいくつか金融機関を持っている。そのうちの一つに U F J 信託銀行がある
- (iv) 信託銀行にも色々あって、そのうちの一つが住友信託銀行である
- (v) さらに U F J 信託銀行を住友信託に売却することで両者が合意した

ことなどを踏まえたうえでようやく、

- (vi) 上の (i) から (v) で説明したようなことが、19日公表された。

という結論に至るわけである。「Xであることが19日公表された」のXに押し込まれた意味内容は、聞き手の背景知識によってはさらに細かく分けて行く必要もあるだろう(もちろんその逆もあるが)。この短文を理解するには主語内部の細かい意味の塊を理解し統合していかなければならないのである。

14 詳細は、Du Bois (2003a, b), Du Bois, et al. (2003), 熊谷 (2004) などを参照されたい。今回の考察以外にも語りの分析から興味深い事実がいくつもわかってきているが、それらについては別の機会に譲ることにする。

参考文献

- Chafe, Wallace L., ed. (1980) *The Pear Stories: Cognitive, Cultural, and Linguistic Aspects of Narrative Production*. Ablex, Norwood, NJ.
- Chafe, Wallace L. (1994) *Discourse, Consciousness, and Time: the Flow and Displacement of Conscious Experience in Speaking and Writing*. The University of Chicago Press,

Chicago, IL.

- Clancy, Patricia M. (1980) "Referential Choice in English and Japanese Narrative Discourse," *The Pear Stories: Cognitive, Cultural, and Linguistic Aspects of Narrative Production*, ed. by Wallace L. Chafe. 127-202, Ablex, Norwood, NJ.
- Downing, Pamela (1980) "Factors Influencing Lexical Choice in Narrative," *The Pear Stories: Cognitive, Cultural, and Linguistic Aspects of Narrative Production*, ed. by Wallace L. Chafe, 89-126, Ablex, Norwood, NJ.
- Du Bois, John W. (1987) "The Discourse Basis of Ergativity," *Language* 63, 805-855.
- Du Bois, John W. (2003a) "Argument Structure: Grammar in Use," *Preferred Argument Structure: Grammar as Architecture for Function*, ed. by John W. Du Bois, Lorraine E. Kumpf and William J. Ashby, 11-60, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam and Philadelphia.
- Du Bois, John W. (2003b) "Discourse and Grammar," *The New Psychology of Language: Cognitive and Functional Approaches to Language Structure* Vol. 2, ed. by Michael Tomasello, 47-87, Lawrence Erlbaum Associates, Mahwah, NJ.
- Du Bois, John W., Lorraine E. Kumpf and William J. Ashby (2003) "Introduction," *Preferred Argument Structure: Grammar as Architecture for Function*, ed. by John W. Du Bois, Lorraine E. Kumpf and William J. Ashby, 1-10, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam and Philadelphia.
- Tannen, Deborah (1980) "A Comparative Analysis of Oral Narrative Strategies: Athenian Greek and American English," *The Pear Stories: Cognitive, Cultural, and Linguistic Aspects of Narrative Production*, ed. by Wallace L. Chafe, 51-87, Ablex, Norwood, NJ.
- 熊谷吉治(2001) 「談話資料が示す英語の能格性」, 音声文法研究会編『文法と音声Ⅲ』, 241-261, くろしお出版, 東京.
- 熊谷吉治(2004) 「英語の自発的談話における韻律的能格性の検証」, 音声文法研究会編『文法と音声Ⅳ』, 77-97, くろしお出版, 東京.
- 定延利之、熊谷吉治、荻田修司(1999) 「旧情報と新情報」, 音声文法研究会編『文法と音声Ⅱ』, 127-148, くろしお出版, 東京.
- ジャッケンドフ, レイ(2004) (水光雅則訳) 『心のパターン—言語の認知科学入門』 岩波書店, 東京.